明日香村埋蔵文化財展示室

牽牛子塚古墳の閉塞石

牽牛子塚古墳は明日香村大字越に所在する終末期古墳で、別名「御前塚」「あさがお塚」古墳とも呼ばれています。昭和53年には環境整備事業の一環として発掘調査が実施されています。墳丘は直径約30m、高さ約4mの円墳で、八角形墳の可能性もあります。盛土は版築によって築かれています。

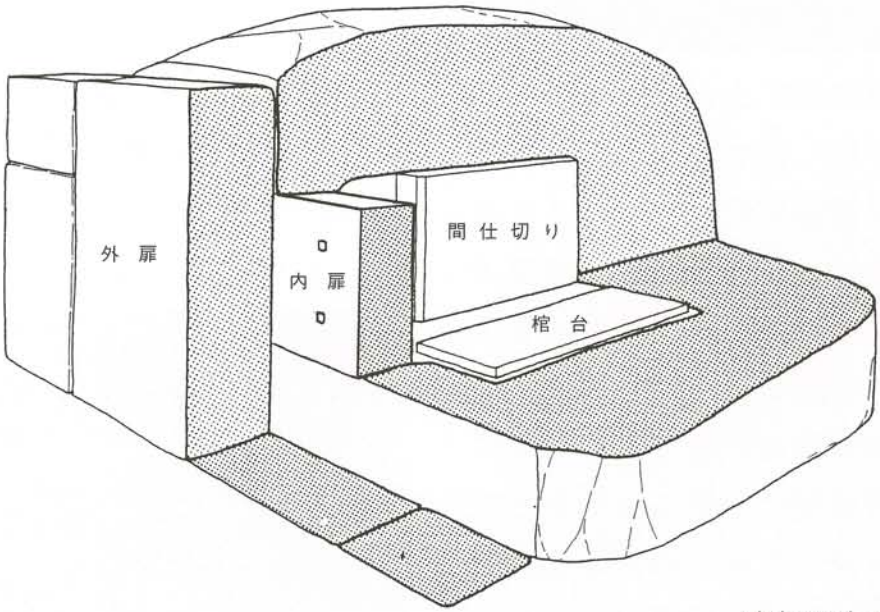
墳丘

埋葬施設は二上山の凝灰角礫岩の巨石を刳り貫いた横口式石槨で中央に間仕切りの壁を有しています。両側には長さ約2mの墓室があり、壁面には漆喰が塗布されています。床面には長さ約1.95m、幅約80cmの棺台が削り出されています。閉塞石については内扉と外扉の二石からなり、内扉は凝灰岩製で高さ約1.15m、厚さ約62cm、幅1.45mを測ります。内扉の四隅には方形の孔が穿たれており、扉飾金具が装着されていたものと考えられます。外扉については安山岩系の石材を用いており、幅2.69m、厚さ約63cm、高さ2.44mあり、現地で斜めに倒れた状態で残っています。

飛鳥地域の刳り貫き式横口式石槨墳については、益田岩船や鬼の俎・雪隠古墳があり、牽牛子塚古墳と益田岩船は巨石を刳り貫いたタイプで、鬼の俎・雪隠古墳や石宝殿古墳（寝屋川市）は床石と蓋石が別々に構成されています。この二つのタイプの前後関係については石宝殿古墳に羨道が存在することから羨道を持つタイプから持たないタイプへと変化していったものと考えられます。ま

石槨内部

た、一石の巨石を刳り貫いたタイプよりも床石と蓋石が別々に造られたタイプの方が先行すると考えられます。更に使用されている石材については鬼の俎・雪隠古墳や益田岩船では硬質の石英閃緑岩（せきえいせんりょくがん）が、牽牛子塚古墳では軟質の凝灰岩が使用されています。他の飛鳥地域の古墳をみると6世紀から7世紀中頃にかけて硬質の石英閃緑岩等が使用され、7世紀後半以降になると軟質の二上山の凝灰岩へと変化していきます。このように考えると飛鳥の刳り貫き式横口式石槨墳は鬼の俎・雪隠古墳から益田岩船、そして牽牛子塚古墳の順に築かれていったと考えることができます。築造年代については石槨構造等から7世紀後半頃と考えられます。被葬者については古墳の立地や出土した歯牙等から斉明天皇と間人皇女の合葬墓と考える説が有力視されています。出土遺物については夾紵棺（きょうちょかん）片や七宝亀甲形座金具、ガラス玉等があり、夾紵棺の一部や閉塞石の内扉は明日香村埋蔵文化財展示室で常設展示しています。



牽牛子塚古墳石槨模式図

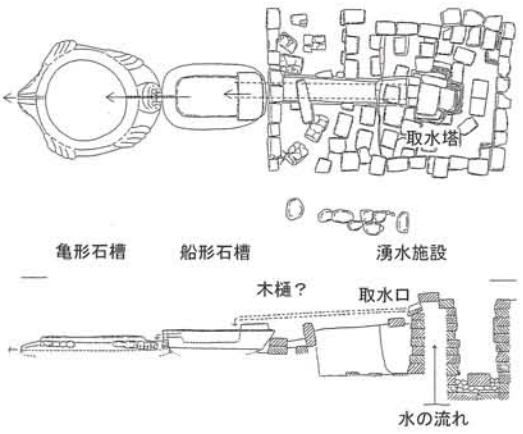
明日香村埋蔵文化財展示室

酒船石遺跡の湧水施設

私たちの生活に欠かせない「水」。現在では蛇口をひねれば簡単に得ることができます。昔は「井戸水」や「湧き水」が生活用水として利用され、現在でも溜池や川の水は水田などに利用されています。

湧水施設

古代飛鳥の都においても生活用水は「湧き水」や「井戸水」が多く利用されてきました。また飛鳥の都は「水の都」と称されるほど「水」を使った施設が多く造られています。例えば飛鳥川に隣接した飛鳥京跡苑池遺構では広大な苑池に石造物を連結させた導水施設、石神遺跡では須弥山石や石人像の噴水施設、また水落遺跡の「漏刻」遺構があります。その他、酒船石遺跡では亀形石槽を中心とした導水施設があり、この遺構には水源となる湧水施設も併設されています。湧水施設は上からみると「コの字」形に砂岩の切石を積み上げたもので、東西約1.8m、南北2.4m以上を測ります。砂岩は長さ約30cm程度に加工されたものを小口積みにしており、目地には礫を充填しています。壁面は現状で11段積み上げており、高さは約1.3mあります。南壁から90cm北側の位置に3～4段積まれた北壁があります。底面にも砂岩が敷き詰められており、施設の中央には砂岩を筒状に積み上げた取水塔があります。取水塔の砂岩は凸形に加工されており、それぞれ11段組み合わされています。高さは1.3mを測り、上部には長さ45cm、幅30cmの蓋石が2石あります。北側の蓋石は取水口を覆うもので冂形を呈しており、取水口は凹形となっています。取水口は幅20cm、深さ6～9cmあり、水が流れやすいように斜めに加工されています。ここから船形石槽までは木樋



などを使って水を流していたものと考えられます。つまり、湧水施設から湧き上がった水は取水塔から木樋を通って船形石槽へと流れていくことになります。この船形石槽には長さ93㎝、深さ20㎝の水槽があり、水槽の側面には直径４㎝の孔があります。この孔と水槽底の比高差は約８㎝あることから、水槽に溜まった水はすぐには亀形石槽へは流れることなく、上澄みだけが孔を通る仕組みとなっています。そして濾過された水は亀形石槽の鼻を通り、甲羅部分にある水槽に溜まります。この甲羅部分には約200リットル、ドラム缶１本分の水を溜めることができます。この導水施設も平安時代になると埋没してしまい、機能が停止しています。その後、湧水施設に代わって同じ場所に新たに木製の曲物を転用して水の確保を行っています。この曲物は直径約50㎝、高さ約34㎝で底板がなく、柄杓（ひしゃく）などを使って汲み上げていたと考えられます。船形石槽の周囲にある礫敷の中から皇朝（こうちょう）十二銭の一つ「饒益神寶（にょうやくしんぽう）」（859年初鋳）が出土しており、９世紀後半頃まで使用されていたことがわかりました。このように酒船石遺跡の湧水施設は飛鳥地域では初めて湧水施設（水源地）と導水施設がセットで確認された例となりました。現在、明日香村埋蔵文化財展示室では湧水施設の取水塔の上部を移設して常設展示しています。

湧水施設と船形・亀型石槽

明日香村埋蔵文化財展示室

竹　野　王　石　塔

竹野王石塔は、龍福寺境内にある多重石塔です。龍福寺は、飛鳥川上流、明日香村大字稲淵に所在します。石塔は、現存する高さが約180cmです。現在は四重目の軸部まで残存していますが、本来は五重塔であったと考えられます。初重軸部の背が高いのは石塔の中でも古い様式をみせるものです。石塔の石材は、奈良県の二上山で産出する凝灰岩です。

龍福寺境内

構造は、各軸部と屋根材を別材で積み上げています。屋根には棟木や屋根も象（かたど）られていました。また、屋根裏は、普通の石造層塔では水平ですが、竹野王層塔では内側の奥に向かって傾斜してつくってあります。この特徴と似たものに、奈良市南田原にある塔の森十三重石塔があり、この特徴は奈良時代後期前後の一手法と考えられます。ほかにも、第四層の軸上面には円形の孔があいており、舎利容器、あるいは経巻を納めていたと考えられています。

石塔近景

竹野王に関する刻銘は、一番下の初重軸部の四面にあります。風化や破損が著しく、判読が困難な部分もありますが、造立主体者と造立年代を読み取ることができます。刻銘は、3cmほどの文字で、体裁は一面に八字詰め七行の字配

りです。字の書体は、奈良時代後期の特徴です。

東面の第１面から「昔阿育…」ではじまり、中ほどに「朝風南葬談武之峯北…」と刻んでいました。北面の第４面には、「天平勝宝三年歳次　辛卯四月廿四日丙子　従二位竹野王」とあります。

これらの銘文によって、石塔が、天平勝宝３（751）年に「朝風」という地に竹野王によって造立されたということがわかりました。銘文にある「朝風」という地名は、現在の飛鳥川と檜前川との間にある丘陵地と考えられ、現在でも小字「アサカゼ」が残っています。

この朝風の地から稲淵に移築された時期はわかりませんが、享保21（1736）年の『大和志』には石塔についての記録があり、それ以前に移築されていたことがわかりました。

なお、竹野王については、人物像がよくわかっていません。奈良市の長屋王邸から出土した木簡群の中に、竹野王の名の記された木簡が出土しています。石塔の竹野王と同一人物である可能性も考えられています。

現在、明日香村埋蔵文化財展示室では石塔のレプリカを常設展示しています。竹野王石塔は、昭和53年に村指定建造物に指定され、実物は稲淵の龍福寺で見学することができます。

（東面）
昔阿育□王八万四千
塔遍□□造□□内
王年珍宝□□□
□□□□□□□
□□□□□□□
其来尚年□□比□
号曰朝風南葬談武

（西面）
□□□□□□□
□即□□□□□
崇□□□□□曰□
□□□□□□□
□□□□□□□
□之長□□□□
臥□□□□□□

（南面）
之峯北際□田之谷
□安□之角□□□
□□之□□□□□
□□□□□□□
□□□□□□□
□□□□□□□
□□□□□□□

（北面）
□□□□□□□
天平勝宝三年歳次
辛卯四月廿四日丙
子
従二位　竹野王

（「奈良県銘文集成」より）

明日香村埋蔵文化財展示室

小治田宮（おはりだのみや）の井戸

小治田宮の井戸は、雷丘の東南、雷丘東方遺跡の一角で出土しました。雷丘東方遺跡は、雷丘の東を中心とするその一帯に広がる遺跡です。これまでの調査で、飛鳥時代の池や奈良時代の倉庫群や礎石建物を確認しています。この遺跡からは、平城宮や難波宮と同じ瓦が出土することから、役所あるいは宮殿の可能性が指摘されていました。

この井戸は、昭和62年に明日香村教育委員会によって発掘されました。南北4.8m、東西4.5m、深さ2.6mの掘形に、一辺の内法が1.68mの井戸枠を据え付けています。井戸枠材はヒノキ板で、最高8段まで遺存しています。枠板は、長さ1.8～1.9m、幅25～30cm、厚さ5～6cmを測ります。枠板の組合せは、上部4段と下部4段とでは異なります。枠材の組み方は、方形横板組隅柱横桟止めとなっています。

井戸底の湧水が伴う砂層の上に、最下段の井戸枠を据え、その枠内に玉石を厚さ10cmほど敷き、さらにそのうえに川原石を1～2段敷いていました。この石敷の直ぐ上には土が堆積しており、井戸が使用されていた当時に堆積した状況を残していました。

井戸内部

この井戸枠内から、土師器や須恵器、墨書土器が出土しており、墨書土器については計23点出土しました。そのうち、前述した石敷直上層から14点の墨書土器が確認されました。墨書には「小治田宮」11点、「小治宮」1点、「副」1点、「福嗣」1点があります。井戸内から出土した土器や黒色土器の特徴から、井戸が製作されてから廃絶するまでの年代を得ることができました。それによると、井戸枠

は奈良時代の８世紀末に作られ、９世紀前半にわたって使用、９世紀後半に完全に埋められたと考えられます。

ところで、『日本霊異記』には、雷丘についての注記があり、「古京小治田宮の北に在り」の一文があります。古代の雷丘が現在の「雷丘」であるという比定に誤りないとすると、井戸付近一帯の雷丘東方遺跡が小治田宮に符合すると考えられます。これにより、雷丘東方遺跡が、奈良時代の小治田宮の可能性が高まり、遡って推古天皇の小墾田宮の可能性も高まったのです。

さて、近年では、自然科学研究法の分野で開発された年輪年代測定法を用いて、井戸枠で使用された木材の年代を推定する試みが行われました。年輪年代測定法によると、井戸枠材の伐採年は758年頃であると判明しました。

同時期の歴史資料『続日本紀』によると、天平宝字４年（760）８月から同５年１月にかけて、淳仁天皇が小治田宮に行幸したという記録が記されています。時期的に近い小治田宮の井戸は、まさに淳仁天皇の行幸にあわせて造られたと推定できます。

現在、明日香村埋蔵文化財展示室では井戸枠を保存処理した後、常設展示しています。

小治田宮墨書土器

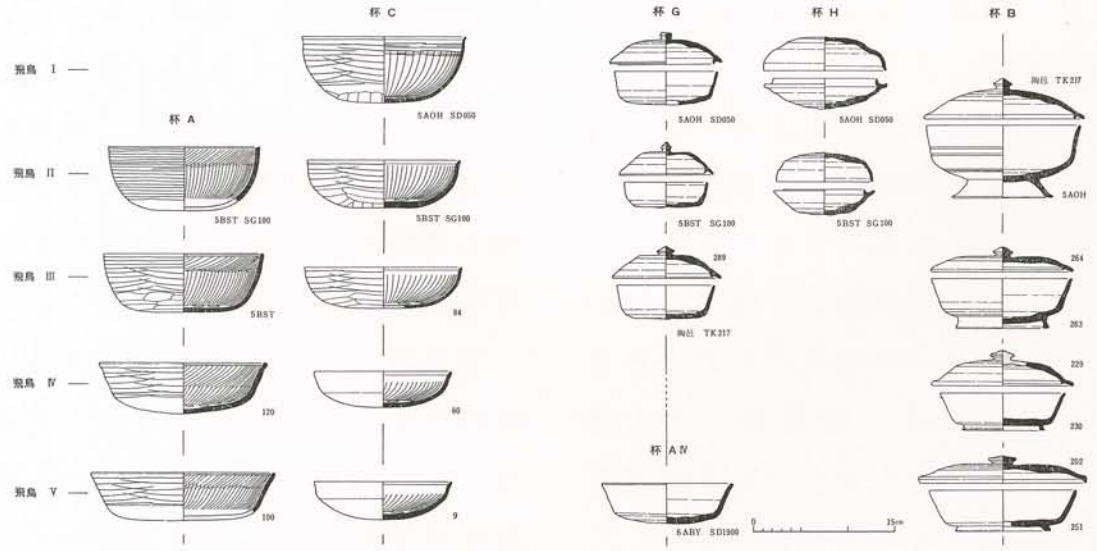
明日香村埋蔵文化財展示室

飛鳥時代の二つの土器

明日香村内で発掘調査をすると、土器や瓦が多く出土します。これらの遺物は、その形や文様、材質などによって、遺跡の時代や性格を推定する重要な資料となります。このうち土器には、野焼きで焼成し、赤茶色で軟質の「土師器（はじき）」と、登窯で焼成し、青灰色で硬質の「須恵器（すえき）」と呼ばれる２種類があります。「土師器」は縄文時代以来の技法で作られたものであるのに対して、「須恵器」は古墳時代に朝鮮半島から渡ってきた登窯で焼かれ、轆轤（ろくろ）を使用する、外来の新しい技術を利用しています。

古墳時代以降、主に土師器・須恵器の２種類の土器が中心を占めますが、この他にも飛鳥時代には、東国や東北で生産された黒色土器（内側に炭素を吸着させたもの）や、韓国の慶州あたりで生産された新羅土器などが、ごく少数の遺跡から出土しています。

土師器・須恵器は、時代によって、その形が少しずつ異なります。古墳時代的なものから、現在の茶碗につながるような形のものへと変化をします。飛鳥時代の100年間をみても、飛鳥Ⅰから飛鳥Ⅴまでの５段階に区分できます。



飛鳥時代の土器の変遷

飛鳥Ⅰは西暦590年代～640年代。飛鳥Ⅱは西暦640年代～660年代。飛鳥Ⅲは西暦660年代後半～670年代。飛鳥Ⅳは西暦680年代～690年代。飛鳥Ⅴは690年代から710年の藤原京に都があった時代にあたります。

土師器は古墳時代以前は粗雑な作りのものでしたが、飛鳥時代初めになると、金属製の鋺（わん）を模倣した杯が現れます。非常に良質な土を使って丁寧につくり、内外面を磨いたり削ったりして光沢を放っています。しかし、時代が下るにつれて、これらの技法も徐々に省略されていきます。

須恵器も古墳時代に流行していた形（椀形の蓋と身を組み合わせたもの）は飛鳥時代中頃にはなくなり、現在に繋がる茶碗形の形態へと変化します。

さらに飛鳥時代の土器には、形態上の変化や共通性の他にもいくつかの特色があります。まず、飛鳥時代以前の土器は、同じ形態の土器には単一の口径のものしかないのに対して、飛鳥時代の土器は、同じ形でも大中小の３種類以上の口径のものが出現します。つまり相似形の器種ができあがってきているのです。もう一つは、杯のほか皿・高杯・平瓶など、実に様々な形態の土器が作られました。

貴族の食事

下級役人の食事

このように全国的に極めて統一的な食器の形態・構成となっています。これを私たちは「律令的土器様式」と呼んでいます。天皇を頂点とした中央集権国家の中で、多くの官人たちの給食制度をまかなうために生み出されました。

飛鳥時代の土器は、このように当時の生活と密接にかかわった遺物で、一片の土器のかけらからも歴史を垣間見ることができます。

（写真提供：奈良文化財研究所）

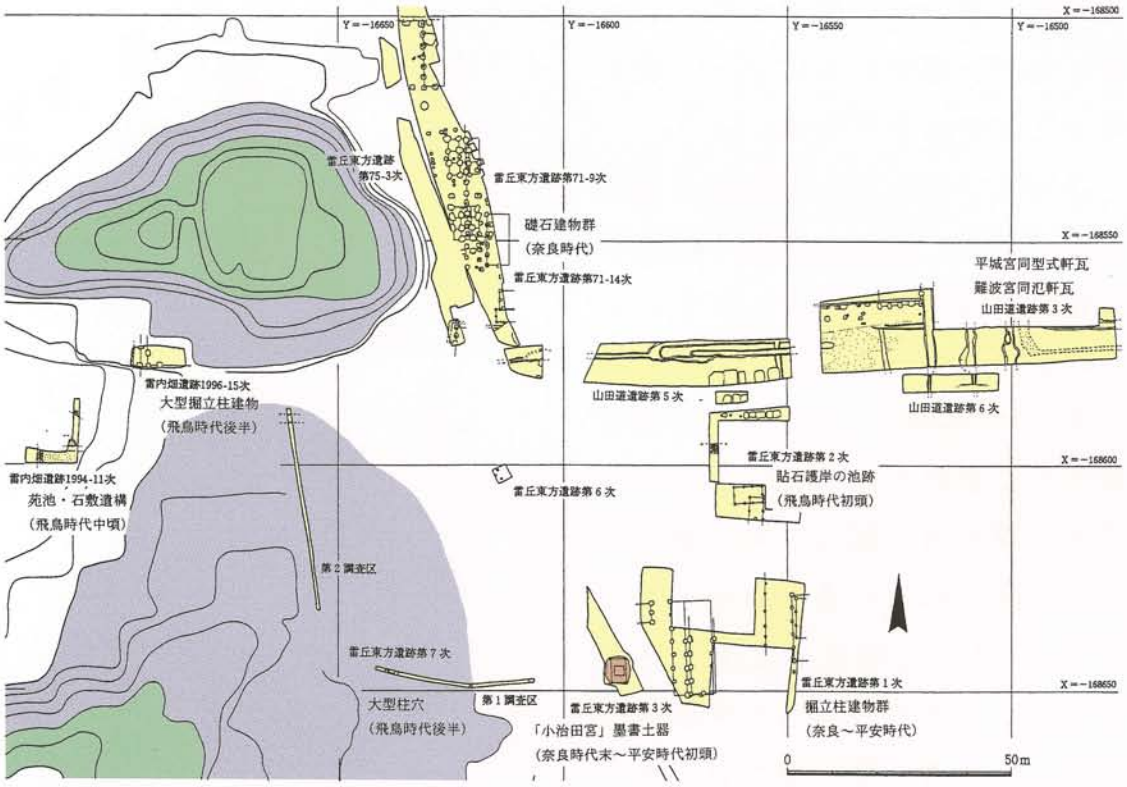
明日香村埋蔵文化財展示室

小治田宮（おはりだのみや）の土器

雷丘の東南地域は、雷丘東方遺跡と呼ばれています。これまでの調査で、飛鳥時代の池や奈良時代の倉庫群、建物を確認しており、平城宮や難波宮と同じ形式の瓦も出土することから、役所や宮殿の可能性が指摘されていました。

この遺跡の性格を特定したのは、ここに紹介する墨書土器です。墨書土器は、雷丘交差点から南へ80mのところで、昭和62年の発掘調査によって、奈良時代の井戸の中から出土しました。

井戸からは土師器・須恵器・黒色土器が多く出土しています。概ね奈良時代末から平安時代前半にかけてのものです。このうち井戸の底からは奈良時代末の土器がまとまって出土しました。この土器の底部外面には「小治田宮」「小治宮」「宮」「□城下」などと書かれたものが23点出土しています。



雷丘東方遺跡周辺図

この墨書土器を見ると、文字の大きさや線の太さ、書風によって、4種類に分けることができます。

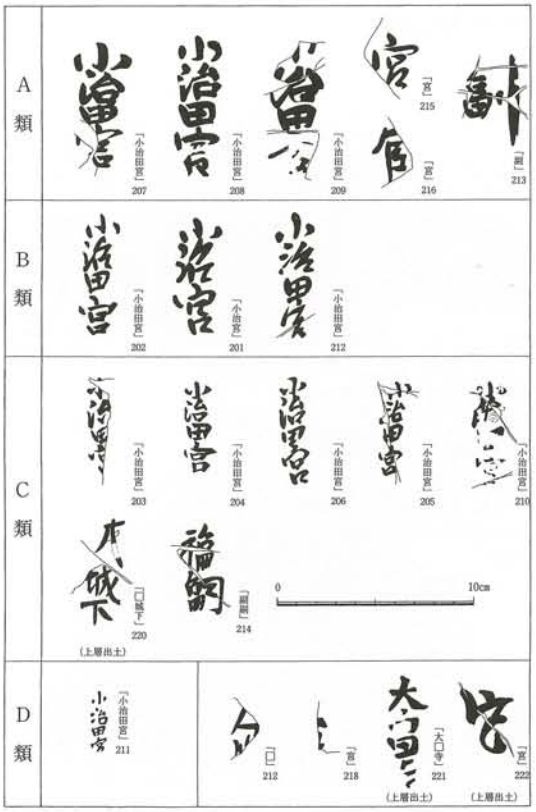
A類はもっとも文字が大きく、太い筆の楷書で力強く書いているもの。B類は、二番目に文字が大きく、中太の筆で草書で流れた書風のもの。C類は、三番目に大きく、中細の筆で、楷書ではっきりと書いているもの。特に「田」という文字の五画目が短いという特色があります。D類は、もっとも文字が小さく、極細の筆で、楷書で書いているものです。

これらの墨書の違いは、使用された筆の違いや、書き手の違いと考えられ、複数の人によって書かれたことがわかります。

これだけまとまって墨書土器が出土すると、遺跡の性格を特定する有力な検討材料となります。さらに土器の細かな観察から、土器の作られた場所（生産地）は複数あったことがわかります。しかも、産地の異なる土器に、同じ書体の文字が書かれているものがあることから、「小治田宮」と墨書されたのは、土器を制作した生産地ではなく、この遺跡に運ばれてから、複数の人々によって墨書されたと考えられます。

そもそも土器に文字を書くという行為は、ある集団の中での土器の所有の目印とするものです。他地域の遺跡でも役所の名前や施設の名前、人名が墨書されるものがよくあります。今回は「小治田宮」と書かれていることから、この土器は小治田宮の所属であることを示しており、この墨書土器が出土した場所は、奈良時代の「小治田宮」であったといえるのです。

このように、文字資料が出土することによって、遺跡の性格や宮殿の名前などが特定できるのです。



「小治田宮」墨書土器の分類

明日香村埋蔵文化財展示室

飛鳥寺の創建瓦　～「花組」と「星組」

飛鳥寺創建時、建物屋根を飾った軒丸瓦には、大きく分けて二つの系統がありました。これらの瓦は「花組」・「星組」と呼ばれています（図１）。「花組」とは、素弁と呼ばれる弁の先端に桜花状の切り込みを入れて、花びらのような形の文様になっているものを指します（写真１）。「星組」は、素弁の弁端外側に小さな珠点を持つ文様になっているものを指します（写真２）。

これらの瓦は、製作技法などにも個性があって、製作工人の違いをも反映しています。写真１の「花組」瓦は、中房と呼ばれる円形の部分に、蓮子と呼ばれる小さな円形文様が配置されており、その数は中心から数えて１＋５になっています。初期的な瓦の中房部分は、断面がややくぼんだ形をしていました。瓦当部分と丸瓦部分の接合方法は、丸瓦の広いほうの先端部分の凸面を広く削り、断面がくさびのような形になったものを瓦当裏面に押しつけ、さらに後から粘土を貼り付け、なでる、というものです。写真３に、貼り付けた粘土をなでつけている痕跡と、丸瓦の先端部分の形をみることができます。写真２の「星組」瓦は、中房部分の断面形が、扁平か、わずかに突出します。瓦当裏面は、中央部分が周縁部分よりも盛り上がっています。丸瓦と瓦当部分の接合方法は、丸瓦の筒部先端を端

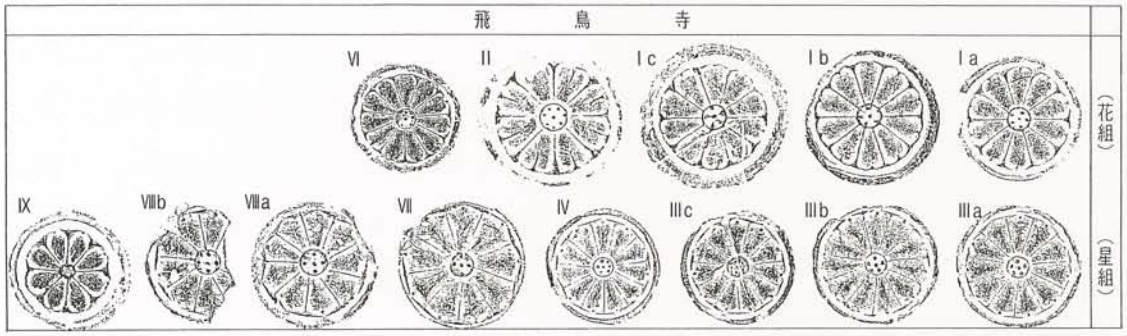


図１　飛鳥寺の軒丸瓦（『続・明日香村史』より）

面側と凹面側から切ることで、断面形でみると「片ほぞ形」にみえる形となっています。この端部を瓦当に押しつけ、薄く補強用の粘土を貼り付けて固定しています。写真４にその断面形と貼り付けた

写真１　「花組」軒丸瓦

粘土の接合部分にひび割れが生じている状態をみることができます。

このような、軒丸瓦の瓦当文様と製作手法は、百済をはじめとした韓半島に多く見られることから、日本において独自に発生したのではなく、韓半島から伝わった

写真２　「星組」軒丸瓦

写真３　「花組」接合状況

と考えられています。また文献にいわれる、瓦博士の来日と飛鳥寺の建設に携わったとすることを裏付ける考古学的な根拠の一つと考えられています。瓦にみられる製作技法の痕跡を観察することは、寺院研究に多くの情報を提供して

写真４　「星組」接合状況

いるだけでなく、我が国の造瓦技術の始まりやその展開過程を歴史的に考えるうえでも重要な研究要素になります。今後、丹念な観察の積み重ねによって、さらなる研究の進展があるかもしれません。

明日香村埋蔵文化財展示室

檜隈寺の甍

檜隈寺は、明日香村檜前に所在した古代寺院で、渡来系氏族である東漢氏によって建立されたことが推測されています。渡来系を示す要素としては、寺院建物の基壇が、韓半島にみられる瓦積基壇と似たものであることなどがあげられ、寺建立の技術的な関連性が指摘されています。また創建時の軒丸瓦は、文献などにより渡来系氏族が本拠地としたとされる地域に築かれた古代寺院に多くみられることなども、檜隈寺が渡来系氏族によって建立されたとする根拠のひとつとされます。近年の発掘調査では、韓半島にその起源がもとめられ、渡来系をしめす一要素とされる、石組みのＬ字形カマドなども検出されており、建立に渡来系氏族が深くかかわっていた可能性がますます高まっています。

今回紹介するのは、この檜隈寺北西部において発掘調査が行われた際に出土した軒丸瓦です。まずは、瓦当文様の基本構成をみてみましょう（図１の右側下から二番目、写真１、写真２）。文様の中心は、中房と呼ばれる円形の文様に、中心から１＋８＋８の蓮子と呼ぶ乳頭状の文様が配列されてい

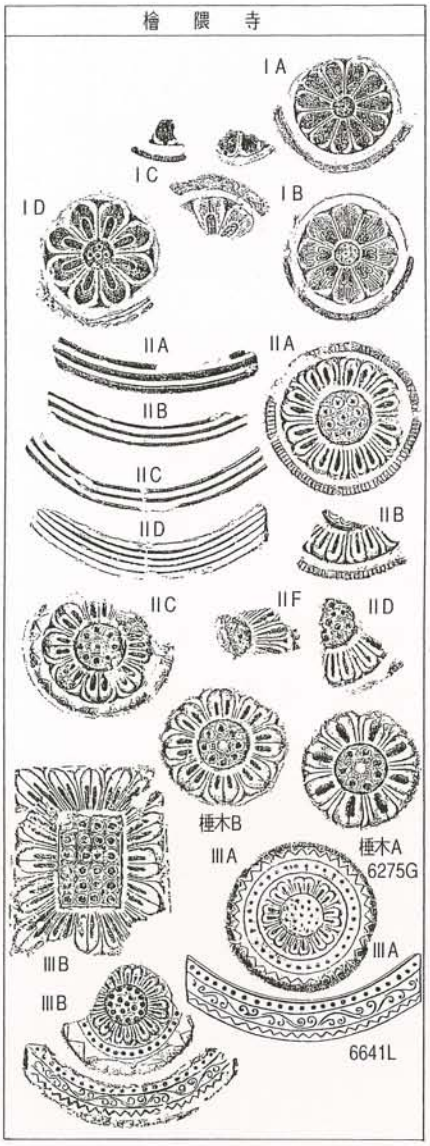


図１　檜隈寺の軒瓦
（『続・明日香村史』より）

ます。その外側には複弁と呼ばれる弁が八葉分みられます。複弁を囲むようにその外側に円圏がめぐり、珠点が並びます。さらに円圏がめぐり、文様の最も外側には、

写真１　檜隈寺所用の軒丸瓦

鋸歯文と呼ばれる山谷形の文様が配列されます。このような軒丸瓦の文様構成は、藤原宮の建物に葺かれた軒丸瓦の文様構成に近似することから、年代的に近い頃製作されたと考えられます。飛鳥浄御原宮から、藤原宮に宮が遷ったの

写真２　瓦にある布の痕跡

が694年ですから、瓦の製作は、その前後に始まっていたと考えられます。さらに『日本書紀』には朱鳥元年（686）八月、軽寺・大窪寺とともに檜隈寺に封百戸を施入したことが書かれていますので、この頃には寺格が整っていたと考えられます。したがって、この瓦は７世紀後半から末頃に製作されたものということができるでしょう。また、これまでの発掘調査によって、瓦の分布状況から、このような型式の瓦が、講堂・塔などで使用されていたことが明

写真３　写真１と同型式の軒丸瓦

らかになっています。このことから、今回紹介した瓦もこういった堂塔で使用されていた可能性が高いといえます。檜隈寺は、瓦の製作年代から建立時期をある程度絞り込むことのできる重要な古代寺院であるといえます。

明日香村埋蔵文化財展示室

川原寺の塼仏（せんぶつ）

はじめに

川原寺は1957・58年、奈良国立文化財研究所によって本格的な発掘調査がなされ、７世紀後半の代表的な寺院として評価されてきました。

川原寺沿革の概要

川原寺の創建は、中大兄皇子が亡き母斉明天皇の菩提を弔うために、飛鳥川原宮があった場所に建立したとするのが一般的で、白村江の戦いで日本が破れ、筑紫国で斉明天皇が亡くなってから飛鳥へ戻り、近江大津宮へ都を移すまでの間に建立されたと考えられています。日本書紀には、673年、一切経をあげる行事を川原寺で行っていることが書かれていますので、この頃には主要な伽藍が整っていたと思われます。

川原寺の塼仏（せんぶつ）

川原寺の塼仏（せんぶつ）は、方形三尊塼仏（ほうけいさんそんせんぶつ）といいます。方形は四角い形を指し、三尊とは中央に如来（にょらい）が、両脇に菩薩（ぼさつ）が配置されている三つの仏を指すところからくる名称です。塼（せん）とは、粘土を焼いて固めたかたまりのことで、身近なものとしては、レンガのようなものを想像してみるとよいでしょう。塼仏（せんぶつ）は型（かた）に粘土を押し込めて作ることから、型さえあれば、同じ形を大量に作りだすことが可能です。このようにつくられた塼仏（せんぶつ）は、主にお堂の壁を飾る焼き物として使われました。

川原寺裏山遺跡出土方形三尊塼仏

塼仏（せんぶつ）の文様

次に塼仏（せんぶつ）の文様についてみてみましょう。中央に座っているの

が、如来です。如来は、お釈迦様が修業をつみ、悟りを開いた後の姿をあらわしているといわれています。如来とは、如（真如、真実）から来生した者という意味で、修行をして悟りを開いた覚者をさします。如来は仏像の世界で最も位が高いとされます。如来がいる台座部分は仏教の花とされる蓮華の文様で表現されています。背後には、光を表している円形の模様が見られます。如来の手の表現にみられる型は、印と呼ばれますが、両手をおなかの前で組んでいるこの表現は、瞑想している状態を表しているといわれています。如来の両脇に菩薩がいますが、菩薩とは如来を目指して修行している段階の仏さまを指し、修業を続ければやがて如来になることが確約されています。仏像の世界では二番目の位に属します。如来が、装飾品などを持たないのに対し、菩薩には装飾品や持ち物が多くみられるのが一般的です。それは、菩薩が古代インドの貴族の服装をしているからです。菩薩の上部にいるのは飛天です。天とは、仏教ができる前からインドの人たちが信じていた神々などをさしています。有名なところでは、四天王などがいます。四天王とは多聞天、広目天、持国天、増長天のことで、仏教のガードマンの役割を担うとされています。天のグループは、仏像の世界で最も位の低い、四番目に位置しています。このような塼仏は、さらに古い形のものが橘寺から出土しています。それは火頭形三尊塼仏と呼ばれ、中国における火頭形三尊塼仏の影響下につくられていると考えられています。中国が唐と呼ばれていた時代の頃です。製作される時間軸としては、火頭形三尊塼仏が最初につくられ、次に方形三尊塼仏がつくられます。川原寺からは、方形三尊塼仏だけが出土しています。

おわりに

塼仏は様々な仏像が集合して成り立っているものであることがおわかり頂けたと思います。瞑想する如来とその脇を固める菩薩が描かれ、その頭上には仏教にとりいれられた神々のうちの一つである飛天がいるという配置です。川原寺からは多量の塼仏が出土していることから、金堂は、あまたの仏たちによって飾られていたことでしょう。

明日香村埋蔵文化財展示室

「花組・星組・雪組」の軒丸瓦

はじめに

飛鳥の古代寺院に使われている瓦は、韓半島の古代寺院に使われている瓦の文様をまねてつくられています。ここでは、「花組・星組・雪組（高句麗系）」と呼ばれることもある瓦について、簡単にその特徴をみていきたいと思います。高句麗とは、飛鳥時代に韓半島の北部にあった国のことです。そこは、現在の北朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国の一部と、その北側の中国の一部を含んだ地域でした。当時の日本とも関わりが深い国で、例えば飛鳥寺の伽藍配置は、高句麗にある清岩里廃寺の影響をうけているといわれています。

花組・星組・雪組瓦の特徴

「雪組」（高句麗系）瓦と呼ばれる瓦は、主に豊浦寺などで使われています。かつてはこの「雪組」（高句麗系）といわれている瓦が、豊浦寺の建てられた最初に使われていた瓦ではないかと考えられていました。近年の研究によれば、

写真１　「花組」軒丸瓦

塔に使用されていたのではないかということがわかってきています。それでは豊浦寺が建てられた当初、どういった瓦が使われていたのでしょうか。それは「花組」、「星組」などと呼ばれる、百済地域に特徴的な瓦に形が似ている瓦でした。「花組」軒丸瓦は花びらの弁の先端が割れているという特徴があります。一部の研究者は、これを花びらの特徴に見立てて「花組」と呼びました。（写真１）「星組」軒丸瓦とは、花びらの先端に、星のような点があるものを呼びます。（写真２）これら「花組」・「星組」と呼ばれる瓦は、飛鳥寺をはじめ、豊浦寺などの比較的古い寺院に多く使われています。

明日香村埋蔵文化財展示室

「花組・星組・雪組」の軒丸瓦

はじめに

飛鳥の古代寺院に使われている瓦は、韓半島の古代寺院に使われている瓦の文様をまねてつくられています。ここでは、「花組・星組・雪組（高句麗系）」と呼ばれることもある瓦について、簡単にその特徴をみていきたいと思います。高句麗とは、飛鳥時代に韓半島の北部にあった国のことです。そこは、現在の北朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国の一部と、その北側の中国の一部を含んだ地域でした。当時の日本とも関わりが深い国で、例えば飛鳥寺の伽藍配置は、高句麗にある清岩里廃寺の影響をうけているといわれています。

花組・星組・雪組瓦の特徴

「雪組」（高句麗系）瓦と呼ばれる瓦は、主に豊浦寺などで使われています。かつてはこの「雪組」（高句麗系）といわれている瓦が、豊浦寺の建てられた最初に使われていた瓦ではないかと考えられていました。近年の研究によれば、

写真１　「花組」軒丸瓦

塔に使用されていたのではないかということがわかってきています。それでは豊浦寺が建てられた当初、どういった瓦が使われていたのでしょうか。それは「花組」、「星組」などと呼ばれる、百済地域に特徴的な瓦に形が似ている瓦でした。「花組」軒丸瓦は花びらの弁の先端が割れているという特徴があります。一部の研究者は、これを花びらの特徴に見立てて「花組」と呼びました。（写真１）「星組」軒丸瓦とは、花びらの先端に、星のような点があるものを呼びます。（写真２）これら「花組」・「星組」と呼ばれる瓦は、飛鳥寺をはじめ、豊浦寺などの比較的古い寺院に多く使われています。

写真２　「星組」軒丸瓦

「雪組」（高句麗系）瓦の特徴はどうでしょう。葉っぱのような形が八つに分かれて配置されており、それぞれの葉っぱの中心には線が表現されています。これらの葉っぱの形の先端部分のあいだには、それぞれ小さな点が一つずつ付けられています。こういった文様の形を雪の結晶にみたて、「雪組」瓦と呼んでいます。このような文様の瓦には隼上り瓦窯という京都府宇治市の瓦窯で焼いているものが含まれていました。この瓦窯からは、全く同じ形の瓦がみつかっていることから、ここでつくられた瓦が直線にして約50kmの距離を、飛鳥の地まで運ばれてきたことになります。古代の瓦は、このような中・長距離の道のりを運ばれていたことになり、発達した流通網を使って様々な物資が行き交っていた当時の物資流通の様子の一端を伺い知ることができる資料といえるでしょう。古代寺院では、こういった遠距離の瓦窯から、瓦が運ばれていることが明らかとなっています。

写真３　「雪組」（高句麗系）軒丸瓦

おわりに

「雪組」の瓦とされる軒丸瓦の特徴をみてきました。古代寺院の瓦には百済や新羅の影響をうけた瓦がある一方で、その他の地域の瓦も一定量占めていることが明らかとなってきています。このことから、これらの寺院が韓半島の瓦を製作した集団と密接な関係をもっていたことがわかります。瓦には、それぞれの出自があり、系譜があるのです。実に様々な顔をもっている瓦は、お寺の特徴を示す顔でもありました。それは、当時の技術的な国際交流の一端を示しているともいえるでしょう。

明日香村埋蔵文化財展示室

ようこそ！明日香村埋蔵文化財展示室へ

日本という国がつくられていく過程には、様々な出来事がありました。そのたくさんの出来事を歴史的に研究し、この国がつくられる状況をあとづけていく方法には、おもに文献を扱う研究と遺跡を扱っておこなう研究があります。

文献とは、『日本書紀』や『古事記』、『万葉集』などに代表される古い文献のことを指します。

一方、遺跡とは、当時の人々が残した政治・社会・文化・生活などのうち、消えることなく地中に残されたそれらの痕跡の全てをいいます。

これらの研究には、それぞれの研究方法がありますが、おのおの得意分野と不得意分野があります。文献には当時起こった出来事が書かれており、人々がどんなことを考えていたのかが明瞭にしめされていて、それらの様子が手に取るようにわかります。

いわば、ソフトの部分を扱っているといえるでしょう。

牽牛子塚古墳の模型

明日香村埋蔵文化財展示室

一方で、これらの文献を書いて残した人々は、本当のことを書いているとは限りませんし、書き手にとって自分たちに都合のいいように書いている可能性があるので、全てが真実だとするのは間違いのもとになります。

遺跡をあつかう考古学では、実際のモノそのものを扱いますので、それが間違いであることはありません。厳然と本物が存在しており、当時の人々が私たちに残してくれた大切なこれらの財産を使って、当時の政治・社会・文化・生活などを復元していくことができます。特に文化や生活などについては、文献に書かれていることが少なく、このような分野を歴史的に復元するのに大きく貢献できます。

実際のモノが眼の前にありますから、現代を生きる私たちにも当時の歴史がイメージしやすくなります。直接的・視覚的に訴えてくるのが、モノを扱う強みでしょう。

復元古代衣装

いわば、ハードの部分を扱っていると考えればわかりやすいでしょうか。

この研究で気をつけなければならないのは、残されたモノが当時の人々が残した全てではなく、失われているモノが多いこと、起こった出来事の年代を考古学で決めるためには、幅をもたせなければならないことなどです。モノをめぐっての解釈にも人によって考え方が異なる場合があり、歴史的な事実に、より近い解釈を導き出すのはとても難しいこととされています。

ここまでみてきた歴史復元の方法については、どちらがより優れているのかではなく、その方法には質的な違いがあることを正しく認識することが大切です。それぞれの得意分野を生かすことで、より歴史的な事実に肉薄できると思われます。文献と考古学の研究成果を生かすことで、より豊かな歴史像に迫ることができます。飛鳥の地域は、このような両方の強みを最大限に生かしつつ、歴史研究を進めることができる絶好のフィールドなのです。しかも、そのフィールドには、古代国家の形成過程を如実に物語る多くの材料が眠っています。これだけの材料がある、魅力的な地域は、ほかにありません。

明日香村埋蔵文化財展示室では、村内にある遺跡のうち、明日香村文化財課が発掘調査を行った遺跡を中心に展示しています。

この展示室は、旧飛鳥村立飛鳥幼稚園の建物を再利用してつくられました。これまでに、速報展やミニ企画展などを催し、文化財を利用した啓蒙普及活動を行っています。

今回のリニューアルにともない、展示のコンセプトを明瞭にしました。日本国における古代国家の形成過程をモノから跡づけてみることです。展示テーマ「東アジアの中の飛鳥～日本国誕生の軌跡～」には、そんな想いを込めています。これまで展示されていたものに、新たに展示されたものが加わり、来館される皆様方に、よりいっそう飛鳥の遺跡がもつ魅力をお伝えすることができることと思います。これらの展示をとおして古代国家の形成過程を身近に感じ、歴史の魅力に触れていただければ幸いです。

牽牛子塚古墳の扉石

明日香村埋蔵文化財展示室

飛鳥前史

はじめに

明日香村を流れる飛鳥川沿いには、飛鳥時代の遺跡だけではなく、縄文時代から古墳時代の遺跡があることがわかっています。例えば稲渕ムカンダ遺跡、島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、飛鳥寺下層遺跡などです。島庄遺跡や飛鳥京下層遺跡では竪穴建物がみつかっており、人々が定住していたこともわかっています。河川沿いに集落が点々と営まれる様子は、縄文時代から古墳時代における集落の特徴ともいえます。この時代の人々が河川から生活用水や魚類を、また水を求めて集まる動物などを獲得するために、川沿いに集落を営むことが最も合理的だったのでしょう。

時代の特徴

縄文時代は今からおよそ１万３千から１万年前、氷河期が終わりを告げ、徐々に気候が暖かくなった頃から始まります。

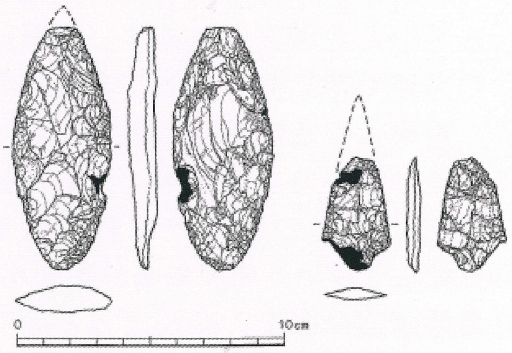


図１飛鳥池出土の木葉形尖頭器と有茎尖頭器
『奈良国立文化財研究所年報1999－Ⅰ』より

写真１　大官大寺下層出土の縄文土器

このころの人々は、石器を使って狩りなどをしていました（図１）。縄文時代は、中国大陸から稲作農耕が伝わり、弥生時代が始まるまでの約１万年間続きます。

弥生時代になると大陸から稲作農耕が伝わり、それまで使われていた石器などの道具だけでなく、鉄器や青銅器などの金属を使うようになります。稲作農耕によってえられた余剰生産物は蓄積され、争いのもとにもなりました。また社会的な階層などもうまれ、古墳時代のはじまりを導くきっかけにもなっています。

古墳時代は、弥生時代から続く各地の伝統的なかたちの墓をつくることをやめ、権力者の墓として代表される前方後円墳のように、大きな墓をつくる時代でした。前方後円墳に

代表される古墳を作り続ける時代といってもよいでしょう。

古墳時代も半ばころになると、韓半島から渡来した人々が新しい文物や技術をたずさえて日本列島にやってきます。

韓式系土器と呼ばれる土器もその文化をしめすモノのうちの一つです。韓式系土器は、カマドの導入にともなって使用される土器で、それまでの日本列島ではみたことがない特徴をもつ土器でした。

カマドには、胴体の長いカメを置きますが、その上にはたくさんの穴が開くコシキと呼ばれる土器がのせられました。コシキは煮炊きに使う道具というよりは、蒸す道具と考えられています。こういった土器は、当時の生活様式の変化を如実にものがたっています。韓式系土器は、ミニチュア土器としてお墓に供えられることもありました。

写真２　山田道下層出土の古墳時代土器

おわりに

村内で発掘調査を行うと、飛鳥時代の遺跡にとどまらず、それよりも古い縄文時代や弥生時代、古墳時代の遺構が検出され、遺物が出土することがあります。

ここに紹介した土器や石器も今からおよそ１万３千年前頃から使われている道具を含んでいます。私たちの祖先は、このころから飛鳥の地域に住み、様々な地域と交流をもちながら、生活を営んでいたのです。わずか10cmにも満たない小さな道具ですが、１万３千年もの太古の時代から残されている貴重な道具であることに想いを馳せるとき、私たちは、そこに悠久の歴史的な営みの片鱗を見ることができます。

時代のうつりかわりはありますが、多くの人々が飛鳥の地域で生活していたことでしょう。古代の文献には、どのくらいの数の人々が生活していたかなどは、書かれていません。古墳時代には、渡来系文物が飛鳥地域で出土していることから、この時代、多くの渡来人がやってきて、開発を行っていたと考えられます。飛鳥になぜ宮都が営まれることになったのか、渡来人の動向がその鍵をにぎっているといわれています。その渡来人の力に目をつけたのが蘇我氏であったことはいうまでもありません。飛鳥寺建立は歴史の必然だったのでしょう。

（写真は奈良文化財研究所提供）

明日香村埋蔵文化財展示室

古墳とその世界

はじめに

一般的に古墳時代とは、３世紀中頃から６世紀終わり頃までのことと考えられています。この時代、前方後円墳に代表される古墳が、南九州から東北地方までの、日本列島各地につくられました。明日香村にもたくさんの古墳があります。村が行った発掘調査で出土した資料を取り上げ、ここに紹介してみましょう。

八釣・東山古墳群

一つ目に、八釣・東山古墳群を取り上げます。この古墳群は、大字八釣から東山にかけて行われた、農地基盤整備事業にともなう発掘調査によって、その内容が明らかになりました。

棺が入っていた古墳の部屋は、石で組みあげられ、横から納棺するタイプです。副葬されたモノは、馬に乗るための道具や、戦のための武器類、食べ物を盛る食器などでした。食器の中には食べ物が入っていたかもしれませんが、実際には残っていません。腐ってしまったのでしょうか。これらの古墳が造られたのは今から約1460年前ごろのことです。

古墳がつくられたこの土地の周辺を本拠地にしていたのは、中臣氏の一族だと考えられています。ひょっとすると古墳には、中臣氏に関係する人々が埋葬されていたのかもしれません。

古墳に副葬されていた馬に乗るための道具は、明日香村内でもその数が少なく、わずか２～３例を数えるのみです。他には細川谷古墳群の上５号墳、阿部山遺跡群の阿部山カイワラ１・２号墳から出土しました。こういった、馬に乗るための道具として、鞍をあげることができます。八釣・東山古墳群から出土した鞍は、鉄の板に、金を施した青銅の板をはりあわせるという、手の込んだつくりかたをしていました。このような道具をもつことができた人は、社会的立場が上位の人でしょう。八釣・東山古墳群に埋葬された人々の中でも、その集団内で中心的な役割を担っている人だったのかもしれません。

飾っていたのは馬だけではありませんでした。埋葬された人々も装飾品を持っています。例えばガラスや銀でできた玉などがみつかりました。ガラス玉は古墳時代でも４世紀後半頃からお墓に入れられはじめます。古墳時代に

八釣・東山古墳群出土副葬品

引き続き、飛鳥時代にもガラス玉は使われ続けていることが明らかになっています。村内にある他の古墳では、マルコ山古墳、牽牛子塚古墳、高松塚古墳、キトラ古墳などから出土しており、飛鳥池工房遺跡ではガラス玉をつくっていたことが確認されました。理科学的な分析が進めば、ここで作られたガラス玉の流通先などが明らかになるかもしれません。

真弓鑵子塚古墳

真弓鑵子塚古墳の周辺には、渡来系文物を多く副葬する古墳が集中しています。石組みの部屋に横から納棺する形は、八釣・東山古墳群のものと同じです。ただし、大きな違いが２点ほどあります。こちらの部屋は、石組みを内側にせり出してつくるため、壁から天井にかけての形が、ドーム状になっていることが１点。棺を納める部屋の入り口が、通常は１つしかないのですが、この古墳には２つあることが２点目です。このようなドーム状の部屋をもつ古墳は、百済をはじめとする韓半島にみられる形であるため、その起源をこの地に求める考え方があります。

真弓鑵子塚古墳石室

真弓鑵子塚古墳出土獣面飾金具

次に、特異な副葬品として獣面飾金具をとりあげましょう。これは日本で類例が少ないタイプの、ベルトを飾る金具です。ややつり上がった目と、鼻の表現があり、頭部には獅子のたてがみのような形がみられます。いくつもの飾り金具によって装飾された、きらびやかなベルトを身につけた貴人の姿が偲ばれます。真弓鑵子塚古墳からは、ミニチュア土器と呼ばれる渡来系文物も出土しており、古墳の特徴を際立たせています。この古墳が渡来系氏族の古墳であることは間違いないでしょう。

６世紀半ば以降に作られはじめた二つの古墳は、中臣氏と渡来系氏族といった異なる出自をもちます。それぞれの古墳は、石室や副葬品によって構成される独自の世界観を見せているのです。古墳とは、当時の政治的・社会的・文化的な背景のもと、埋葬する人とされる人の思いを端的に表現することを目指した、個性的な小宇宙だった、といえるかもしれません。

明日香村埋蔵文化財展示室

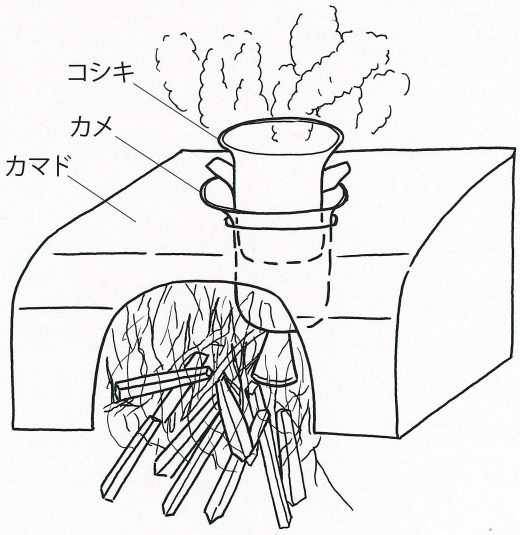
昇華する渡来の文化

はじめに

古墳時代のなかばから後半頃（５～６世紀）に、韓半島から海を渡ってきた人々がいました。以降、数度にわたって渡来の波がやってきます。原因はそれぞれでしょう。自国での戦争などに巻き込まれ、隣国に亡命することを余儀なくされた人たちがいたかもしれません。活発な交易活動などで行き来するうちに、定着した人々もいたはずです。交流を頻繁に繰り返すうち、特定の濃密な人間関係がつくられます。このような人々は、定着した先々に自分たちの生活や文化を持ち込みつつ、その土地になじんでいきました。渡り来た人々の文化は、世代交代が進むにつれ、やがてその形を変えていきます。

カマドの使用

渡来した人々によってもたらされた生活様式の一つに、カマドの使用があります。もともと日本の住居についている火処は、地面に直接つくられた炉でした。そこに火をくべて、煮炊きをします。炉が住居の真ん中付近に設置されるのに対し、カマドは壁際に作られることが多いようです。カマドからは煙突が伸び、そこから煙が外へと出ていきます。カマドでは、その形にあう土器を使っていました。これらの土器は、韓半島から持ち込まれたのか、定着先の粘土で、新たに作られたものであったのかは、わかりにくいようです。一般的に、これらをあわせて、韓式系土器と呼んでいます。



カマド使用のイメージ図

カマドの普及によって、土器も形を変えていきました。例えば煮炊きに使う甕（かめ）。炉で使う甕は底が丸く、全体のフォルムは球形です。直に置くと転がってしまうため、周りを支脚で固めています。一方、カマドで使われる土器の場合は、カマド本体の天井部分に穴がありますので、そこに甕を掛け置きしました。

加熱効率を上げるための工夫でしょうか。時間の経過とともに、甕の胴体はより長くなる方向へと、形を変えていきます。

ミニチュア土器の副葬

ミニチュア土器と呼ばれる副葬品は、カマドと、それにともなう韓式系土器を模倣したミニチュアです。ミニ

カイワラ２号墳ミニチュア炊飯具

チュア土器をお墓に入れる風習は、当時の倭人社会にはありませんでした。渡来系の人たちが持ち込んだ風習といえるでしょう。近年ミニチュア土器が出土した古墳に、真弓スズミ１・２号墳、阿部山カイワラ１・２号墳があります。真弓・阿部山の地域は、古代に檜前と呼ばれた地域の西と南に含まれるか、あるいは隣接しているようです。周辺地域は多くの渡来系氏族によって開発されていることが、渡来系文物の広がりから明らかにされています。一方で、文献の記載からも、渡来系氏族の伝承が色濃く残る地域の一つとして、取り上げることができるようです。ミニチュア土器は、その他の渡来系文物と高い確率で同時に出土します。そこでミニチュア土器以外の、渡来系とされる文物を紹介してみましょう。

渡来系文物

大壁建物などの住居、オンドル。韓式系土器と呼ばれる一連の土器群。これらは主に集落からみつかるものです。銀釧といったブレスレット、釵子（さいし）と呼ばれるかんざし。横穴式石室の中でも特に、壁を内側にせりだしてドーム状に屋根をつくるもの。馬具などでも、韓半島の影響を強く受けた形をもつ特徴的な一群、底が平たい形をした須恵器壺。こういった多くが、いわゆる渡来系文物の要素としてあげられます。

モノの出自を、いつごろのどこに求めるのかは、容易に決まりません。モノの特徴から探っていくことが重要です。渡来した時期と原因を探っていくことは、相互交流の様相をより深く理解するために必要なことでしょう。

一方で、６C 前半から半ばにかけて渡来した文化の一つとして、ドーム状につくられた天井の横穴式石室を築く古墳の流行があげられます。こういった石室は、当時の百済地域で流行しているものによく似ているのでしょう。百済から渡来した人か、そういった人々の影響下にあった人が作ったお墓ということがいえるかもしれません。

複雑に絡み合う文化要素

生活様式が劇的に変わるほどの文化が外部から持ち込まれた時、生活スタイルが急激に変化するのかどうかは、受け入れる人間たちのおかれた環境や意識によって違いがあるはずです。すぐに新来の文化を取り入れた地域もあれば、世代交代が進む中で徐々に他文化が定着していった地域もあったでしょう。このような文化を受けいれる側の状況は、必ずしも単一ではなく、一方的でもありません。様々な要素が複雑に絡み合い、しかも受容する側の事情に大きく左右されます。このようにして渡来の文化は昇華していったのでしょう。